

又あふさかの關はこへなんとてあくればおはりの國へこえにけり。

〔藤河の記〕廿六日○文明五年五月北川といふ川ばた水落す、法印、伊賀の住人におほせつけたるによりて、藤長などいふ者どもきたりて、こしをかたにかけてわたりす。

いかゞせん此五月雨に北川のあさ瀬ふみ渡る人なかりせば、略中廿八日、菩提寺をたちて、上野小田寺など云所をとる、たやまごえは、川の水いまだわたりがたかるべしとて、かさぎどをりにおもむく、島の原川といふ河をわたりて、

亥まの原川せの浪のかちわたりたやまごえをばよそになしつ、

〔加越能山川記能登〕近江川 尾川

近江川尻川は、能州羽咋郡にあり、常に歩渡なり、出水には必ず例の入川にて過あり、海際の砂川は、何方にも例の入物なり、略中此川少にても水出る時は、往來人の涉るを見て涉るべし、不案内成者度々過有、

〔播州名所巡覽圖繪二〕明石川 總門(明石城の外にあり、川中二町餘、かち渡り)、源は三木郡に出て、上に衣川二越の名あり、

〔萬葉集十雜歌〕七夕
天河足沾渡、君之手毛未枕者、夜之深去良久、

〔萬葉集略解十上〕彦星の步渡せし意也

〔後撰和歌集雜七〕人のもとに文遣はしける男、人に見せけりとき、てつかはしける、

讀人亥らず

皆人にふみみせけりなみなせ川其わたりこそまづは淺けれ

〔散木弃詩集九〕恨躬恥運雜歌百首

しみこほる諫訪のとなかのかちわたりうちとけられぬ世にもふるかな

沙彌能貪上